「お菊さん」という優しい響きのオペラが、いまから約１３０年も前のパリで初演されていた。その時から幾星霜が経った今年の５月、日本で初めてそのオペラ全曲が初演されたのだ。初演したのは、日本橋を本拠とする日本橋オペラ研究会。初演の場所は日本橋劇場と、「お菊さん」に相応しい団体と会場だ。じつは１年前に上演が計画されていたのだが、コロナ禍で延び、ようやく５月２９日と３０日に幕が開いた。珍しいオペラの初演とあり、オペラ好きの関心を呼んで、両日共に満員の盛況（５０パーセントの入場制限を守り、２日間の上演に）となった。

「お菊さん」の原作は、フランスの人気作家ピエール・ロティの小説。ロティは１８８５年にフランス海軍士官として長崎を訪れ、１ヶ月ほど滞在。現地の芸者と暮らした想い出を小説にまとめた。１９世紀末といえばヨーロッパで異国趣味が流行し、とくにジャポニズムが人気だった。小説もこの波に乗って大評判になっていた。「お菊さん」に興味を持ち、オペラ化を思い立ったのが、指揮者であり作曲家のアンドレ・メサジェ（１８５３～１９２９）だった。こうしてメサジェ自身の指揮により、「お菊さん」は１８９３年にパリのルネサンス座で初演された。メサジェは軽いオペレッタやミュージカルを得意としていたが、一時は忘れられた作曲家だった。しかし近年フランスでは、自国のオペラを再評価する機運が高まり、メサジェの「フォルチュニオ」「情熱的に」「可愛いミシュ」などのオペレッタやミュージカルがフランス各地で復刻上演され、日本でもそのライヴ映像が発売されるようになった。

日本橋オペラによる「お菊さん」の公演は、日本語による訳詞（日本語と英語の字幕付き）で、ピアノ伴奏による上演となった。舞台は明治時代の長崎で、ゲイシャや斡旋人、長崎の住民たちが登場するので、日本語での上演は分かりやすく親しめる。今回の上演で特筆されるのが、伝統芸能の「能」を演出に取り入れたこと。日本橋劇場の舞台には能舞台を模した松羽目がデザインされている。その舞台を生かし、オペラの舞台に能を取り入れたのだ。プロローグとエピローグ、各幕の最初には金春流能楽師山井綱雄氏による能が披露された。とくに３幕の夏祭りの場面では、本来演じられるバレエの代わりに、華やかな能が舞われた。この部分のメサジェの曲は流麗で、最後には「さくらさくら」の旋律もアレンジされており、まるで能のために作られた曲のようだった。

メサジェの曲はいかにもフランスふうに繊細で、流れるような美しい旋律が特徴だ。異国情緒にあふれたフランス・オペラとお能のコラボレーションは新鮮で、舞台に不思議な緊迫感が生まれた。

物語は、フランス海軍士官のピエールとその友人イヴと芸者のお菊さんやその友人・親戚たちとのひと夏の短い交流が幻想的に描かれる。主役のお菊さんを演じたのは、日本橋オペラの代表、福田祥子。華やかな衣裳の影で、つかの間の愛に悩む女性をはかなげに演じた。もとはドラマチックな声質を持つ福田だが、今回は柔らかい声で繊細な旋律を歌いあげた。とくに３幕の名アリア「セミの歌」は聴きものだった。男声陣ではピエール役の池本和憲やイヴ役の上田誠司、勘五郎役の飯沼友視も好演。女声ではお雪役の高橋千夏、お梅役の田辺いづみも好演だった。ピアノの居福健太郎は、２時間ほどのオペラを一人で演奏。全体を統率して指揮したのは佐々木修。出演者たちがいずれも生き生きと演奏していたのが印象に残った。「お菊さん」はこれまで長い間、上演の機会に恵まれなかった。会場で配られたプログラムにはその事情やピエール・ロティが「お菊さん」を書いた背景などが詳しく綴られている。それによると初演時は１６回上演されたあと、モンテカルロやブリュッセルで上演。１９２０年にはニューヨークで、三浦環の主演で上演されたという。しかしその後、数回上演されたものの、しばらくは忘れられた作品だった。その理由は似通った題材のプッチーニ「蝶々夫人」が人気になったのが原因の一つかもしれないという。じつはプッチーニとメサジェは１８９２年夏にイタリアのコモ湖に一緒に滞在しており、この時にメサジェが作曲していた「お菊さん」が、プッチーニの「蝶々夫人」に影響を与えたという。これらの事情もプログラムには豊富な写真と資料と共に紹介されている。また指揮者の佐々木修と主演の福田祥子は、ロティが描いたお菊さん（実在の女性で本名はお兼さん）の足跡を長崎に訪ね、彼女の生涯について調べた資料をプログラムに発表している。

日本を題材とした知られざるオペラを発掘して紹介し、全曲日本初演した日本橋オペラの「お菊さん」の舞台は、日本のオペラ史に残る、貴重な公演となった。

（オペラ評論家 石戸谷結子）